

# 新潟産業大学報

# 青海波



第 6 号

発行日 平成 6 年 4 月 20 日  
編集 新潟産業大学  
新潟県柏崎市大字軽井川4730番地  
TEL 0257-24-6655  
FAX 0257-22-1300

## 「死に至る病」の処方箋

—— オリジナリティ教育実現のために ——  
(卒業式の挨拶からの divertimento)

学長 金田 一郎



一寸前まで、  
一般消費者の  
間では「国産

米の保護を止めて安い外国米を輸入すべきだ」という声がかかりあった。ところが、今では、一転して「国産米を保護すべきだ」という声が高まってきている。

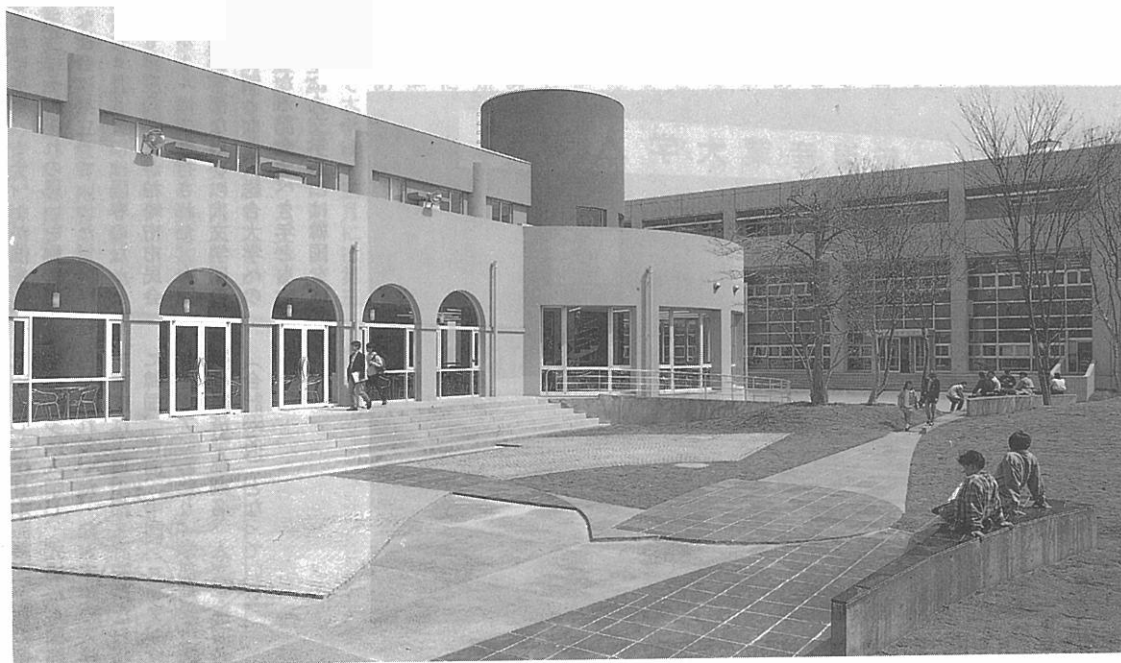
また間もなく変わるかも知れぬが、人間は、個人としては確かな判断をなし得ても、Mass (集団) の一員となると一貫性のない言動を取り易い。最近改めて、Mass, las masas についての彼のオルテガ (José Ortega y Gasset) の警告を思い出す次第である。外見とは裏腹に、価値観を標準化しようとする最近の世の中の、「無意識」の構造は、オルテガの時代よりもその危険性を増したかも知れない。

ナチスはクーデターによってではなく選挙によって政権を獲得したという事実を、想起すべきである。選んだのは、飽くまで一般民衆なのである。三〇年代よりはもう少し手の込んだ形で「ヒトラー現象」が再現する可能性は、現在地球上のどこにも存在する、と考

えてよいであらう。何人もの「ゲッベルス」の働きをする情報処理・操作・伝達の道具立てが、ハイテク・レベルで揃っている。皮肉な事であるが、ここで、ヒトラーも利用した「ニーチェ」に拠り所を求めることになる。

Mass 21 "Übermensch" (超人) を対置することの意味は何か。とんでもない骨董品か怪物を持ち出して来たものだと思ふ人もあろうが、現在の日本社会の「足引き構造」を治すには、こんな荒唐治しか残っていないということである。平均化、標準化の方に足を引っ張られたとき、逆に引っ張り返す拠り所として、「超克」の目標として、それは少しは役立つかも知れない。「価値」の荷負者として。

ただ、一つ気掛かりな事。世の中には裏の裏がある。物事は、一度引っ繰り返すと別の眺めが展開する。二度引っ繰り返すと元に戻るか? 「価値の転倒遊び」は危険でもある。戻らなかつたら大変だ。その点は、同時に心得ておく必要がある。亡霊との付き合いに深入りは禁物である。



# 新たなスタート

入試委員・助教 吉村孝司

開学七年目を迎えた本学にとって今春は新たなスタートの年となった。まず3月15日に人文学部環日本海文化学科の開設式を本学

講堂にて県内外の来賓を迎えて挙行、その後会場を市内ホテルに替え、盛大に祝賀会を行った。当日は昨年春から建設を進めてきた新

学部校舎の公開も行われ、先端設備を整備した各種施設には大きな関心が寄せられていた。

引き続き19日には第3回卒業式を早春の晴天のもと、柏崎市市民会館大ホールにて多数の御父兄の御臨席のもとに挙行し、卒業生総代の星隆君が53名の卒業生を代表して学位記を金田学長より授与された。卒業式の後には会場を替え、

賑やかに卒業パーティーが催され、卒業生はそれぞれの思いを胸に新たな社会に巣立っていった。

また4月5日には陽春のなか、平成6年度入学式が柏崎市市民会館大ホールにて挙行された。今回から経済学部ならびに人文学部の2学部体制となり、総合大学への第一歩となる記念すべき年ともいえる。また人文学部には韓国をは

じめとした環日本海諸国からの留学生も多数入学し、式場にも国際色が溢れていた。なお本年の入学者は構成は1道1都2府32県ならびに韓国、台湾、中国、ロシア、マレーシアにわたり、学部別学生総数は経済学部356名、人文学部197名(合計553名)となっている。



▲平成6年3月15日。人文学部環日本海文化学科開設式典(於:本学講堂)



▲平成6年3月19日。第3回卒業式(於:柏崎市市民会館)



▲平成6年4月5日。入学式(於:柏崎市市民会館)

# Fluctuat nec mergitur

副学長 川村 克己



清らかな風のそよぐ柏崎、軽井川の杜に、いまういいうい

生した。中庭に面するその建物の姿は、中世ヨーロッパの修道院の面影を溢(あふ)れて、静かに知の新たな展開を準備している。

すでに着々として成果をあげつつある経済学部経済学科と並んで、人文学部環日本海文化学科という他に例を見ない新たな学問の府が発足しようとしている。環日本海

経済圏という視点は金田学長の発想になるのだが、それを支えるものとして、或いはそれを正しく理解するものとして、日本海をめぐる諸地方の言語・歴史・社会など文化へのアプローチは是非なされなければならないと思われる。

その様々な文化の発するシニフィアン(意味表現)を解説することによって、正しくシニフィエ(意味内容)を捉えていくことが求められよう。そのためにも、とりわけ言語——日本語・ロシア語・中国語・朝鮮語——を学ぶこと

は肝要であろう。最新の機器を備えた視聴覚教室は、それらの言語を学ぶために、よい効果を發揮しうるであろう。

様々な思いをこめた学生が、多くの異邦の友人たちも迎えて、集い、それぞれに抱負を持った教師たちとともに、この新しい試みにいま第一歩を踏み出そうとしている。よい意味でのカルチャー・ショックを、こもごもに与え合いながら、自分たちの文化に教養の相対化と深化を身につけていくに違いない。

環日本海圏を足がかりとして、更にその環を広げて、やがて自由で活力に満ちたアジア共同体を創造する第一歩となる、そんな夢を私は抱いている。

学舎の外側から見てみたまえ。大海に乗り出す巨船の姿を想わせるだろう。フランスのパリ市の紋章は波にゆれる帆船で、その銘句にラテン語で、'Fluctuat nec mergitur'(たゆたえども沈まず)とある。幾多の波浪を越えて、いま船出した私たちの学科もそのようでありたい。

# これからの大学像を求めて

経済学部長 坂東 淳悦



バブル経済から一転して平成大不況という厳しい社会・経済環境

にあつて、大学教育も今まさに重大な岐路に立たされている。歴史的とまで称されるこの転換期に直面して私ども大学教育に携わる者として、改めてその意義、役割を噛み締めてみるのが大切である。

そのような時に思い出されるのは、人類のために世界平和を訴え続け、考える人、行動する人として、三十数年前に凶弾に倒れたにもかかわらず、今なお人々に敬慕されている、アメリカ合衆国第35代大統領、ジョン・F・ケネディの平和への戦略(The Strategy Of Peace)という演説の一節である。

彼はその中で、イギリスの詩人ジョン・メースフィルドの「この地上にあるもので大学ほど美しいものはあまりない」という文章を引用しながら、その美しさは、「とがった屋根や塔、学園の芝生やツタの生い茂った壁のことを指

しているのではない。『無知を憎む人々が真理を知ろうと努力し、真理を知っている人が他の人々の目を開かせようと努力する場所』だからである。」という文言である。

入れ物、器ではなく、それに携わる者の姿勢であり対応である。自明の事とはいえ、本来の大学教育の意味を改めて考えさせてくれているものとして印象深い。人生は有限だが、教育は無限の可能性と素晴らしさを秘めているといわれるが、教職員、学生それぞれの立場で、知的向上心と人間性の高揚に真摯に取り組まなければならないし、絶えざる自己研鑽、自己啓発に勤めなければならない。

おかげで本学は、三月には第三期卒業生233名を社会に送り出し、この度経済学部356名、人文学部197名の新入生を迎え入れることができた。今後とも社会に開かれた大学として、知的情報の発信基地の中核として機能するオープン・システムであるためにも、優れたスタッフの確保と教育内容の質的・量的充実が求め、社会に評価される有意な人材の育成、排出に邁進

しなればならない。世界はますます開放され、イデオロギー、国家そして文化の枠が取り払われつつある大きな時代の動の中で、将来に向けて魅力ある大学を目指さなければならない。



# 環日本海文化学科について

人文学部長 光 益 徹 也



本年四月より本大学に人文学部が開設され其の名称も環日本海文

化学科と云う、聞きなれない、全国にも例のない新学部が発足することになりました。

本学が経済学部一学部だけでは将来、おぼつかないで、女子学生の進学向上にもあわせて最低一学部を設けたいと云うのが、金田学長の構想で、三年前に新学部設立の構想がなされました。

人文学部にするか、国際学部にするか。教職課程をもうけるか否か。講座の内容と併せ、最終的に観光学科を加えた学部構想が出来たのですが、監督官庁の文部省がゴーを出しません。その結果三転三転して、新潟県独自の立地条件を考慮に入れた、環日本海文化学科に決定しました。

そもそも環日本海経済文化圏とは本学の金田学長が日本で最初となえたユニークな発想で、その発想の震源地である当学に、前例を見ない学科が認可され発足しま

したのは関係者も喜んでおりますと共に、国も県も注目し、マスコミも報道して、新しい大学としての注目を浴びたわけです。

学科の内容は一言で申せば、ロシア、韓国、中国語の徹底した習得とその文化の学習です。語学を通じてその文化生活をしり、文化

風俗を通じて真のその国の言葉を知る。その文化も一片の文化的知識ではなく、膚で感じる民族の血風習、文化を知ると云う、実学的内容を中心とします。例えば、韓国のハンゲル語に通じ、韓国の歴史

風俗、文化を知り、日本人の深層にひそむ、日本独自の文化を掘出し

て学び、それを又韓国に知らせ相互の文化、政治、経済の糧とする。全てが血を通じて理解修得すると云う内容です。カリキュラムの内容を見れば、それがよく解ると

思います。新しい国際交流は偏見と読書や知識からだけのもではなく、全てが事実と云うことに基盤をおかねばなりません。言葉も文化芸術

もそれぞれの民族の生活感情に立脚しているの、先ずそれを学ば

う、そして知ろう。そしてそれを実際の生活に活かそう。そういう発想が本学部の出発点といえます。この発想が成功するか画餅になるかは、私共の熱意と努力にかかっております。

お互い新しい夢に向かって邁進いたしましょう。



## 平成6年度入試を振り返って

前入試委員長 沼 岡 努

2月22日に行われた「一般入學試験B方式」、「留学生」、「社会人」、「スポーツ推薦」各入試をもって平成6年度入学者選抜試験を何とか無事に終えることができた。今回の入試は、特に4月開設となる人文学部（環日本海文化学科）の第1期生の選抜という意味も加わり、既存経済学部の入試と共に、総合大学的な学部間連携の入試として展開した。

学内外関係者の注目するところとなった人文学部入試においては、言うまでもなく蓄積データが皆無であったため、出願者数や歩留率（合格者に占める最終手続者の割合）の予測が困難であったが、結果的には経済学部のこれまでのデータを基にした予測とさ程の狂いはなかった。人文学部のレベルを受験生が経済学部のそれとほぼ

同程度になることを予想し、受験したことを半ば示すものと理解される。（現に、昨年の夏、秋に行われた大手予備校の全国模試における本学人文学部の偏差値は経済学部の「B方式」とほぼ同一であった。）「自己推薦入試」では倍率が低かったものの、成績が6割以上でなければ合格できなかったことから、レベル的には経済学部の自己推薦入試に近いものとなったし、「A方式入試」においてもほぼ経済学部のレベルに達することができた。また、入試区分をトータルすると、平均倍率6.3倍となり、これは新設学部としてはまずまずの数字であると言えよう。（ちなみに、経済学部発足時の倍率は4.3倍であった。）昨年度から公表している各入試区分の合否ボーダーについては次頁表(二)に掲げられて

いるので、こちらの数値も参考にしていたいただきたい。

ところで、人文学部入試の大きな特色となっていた「留学生入學試験」については、指定校制、公募制共に出願、入學手続きが順調で、3月22日現在、ロシア、中国、韓国、台湾、マレーシア5カ国から計56名の入学者が予定されている。国際色豊かなキャンパスになることは、学生たちの勉強、生活両面で大きなプラスになるだろう。人文学部のこうした留学生重視の方針は、入試レベルでみると決して経済学部の留学生入試にも無関係ではないようで、来年度以降も出願数増加の好影響が期待できようである。

一方、経済学部の入試は、昨年度の高倍率、合否ボーダーの上昇の影響を受け、「センター方式入試」「留学生入試」を除く入試区分で若干出願が伸び悩んだ。受験生が本学の難化傾向を読み取り、多少敬遠したように思われる。（受験年齢である18才人口の減少や県内3大学の新設などもその原因として考えられるであろう。）だがその反面、出願者を出身県別に分析してみると、前年度よりもまた一層出願者の全国化が「質的に」押し進められたことに気付く。北は北海道から南は沖縄までほぼ全都道府県から願書が寄せられた

点は昨年度同様であったが、遠方の道府県からの出願が今厚みを増した点、注目に値する。「地方大学」から「全国大学」への変身は着実に進んでいると言えよう。

経済学部入試結果については下表(一)の示す通りなので、多言は要しないだろう。問題が少し難しかったせいもあり、「B方式入試」のボーダーが若干下がったという点を除けば、各入試区分ともほぼ昨年同様の結果が得られた。

平成6年度入試が終わった今、個人的には、来年度入試へ向けて改めて入試のあり方を抜本的に問直し、再構築することが必要ではないかと感じている。試験問題の傾向や質の適否という問題や、各入試区分の受験科目(科目数および科目名)、授業料軽減制度、採点作業等の再検討などはその一部である。入試のあり方を、在学4年間の勉強内容や、就職試験、社会に出てからの必要性などとの関連から見直してみることが必要ではないだろうか。ともあれ、新しい人文学部のスタッフを擁し、新入試委員会が近く組織されるであろうから、画期的な新潟産業大学の入試を体系化されることを切に願います。

■H6年度新潟産業大学入試結果

(一) 経済学部

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
スポーツ特別推薦	約 10	67	17	—
指定校推薦	約 40	100	100	—
自己推薦	約 50	373	50	174/250
一般入試A方式	約 120	1,162	197	110/200
センター入試	約 40	511	121	205/250
一般入試B方式	約 40	946	129	136/200
社会人入試	若干名	2	1	—
留学生入試	若干名	8	6	—
合計	300	3,169	621	—

(二) 人文学部

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
スポーツ特別推薦	若干名	22	6	—
自己推薦	約 25	62	27	158/250
一般入試A方式	約 50	288	100	106/200
一般入試B方式	約 30	313	103	130/200
社会人入試	若干名	1	1	—
留学生入試	約 45	76	62	—
合計	150	762	299	—

就職課から

不況倒産、リストラの嵐の中大卒の雇用環境は、今年度更に冷え込み「就職氷河期」というマスコミ用語さえ生まれた。

求人倍率は、男子文系で一・六倍と三年連続の減少。四大女子では〇・八七倍と、ついに一・〇倍を割ってしまった。職業安定法の改正によって、昨年のような内定取り消しこそなかったものの、その分企業は、採用枠を絞り込み、内定者の歩留りを厳しくチェックしながら長期にわたる採用選考を行った。

本学もこの状況から決して例外ではなく、求人社数で前年比二六パーセント減、買手市場の就職戦線となった。主要な企業から内定

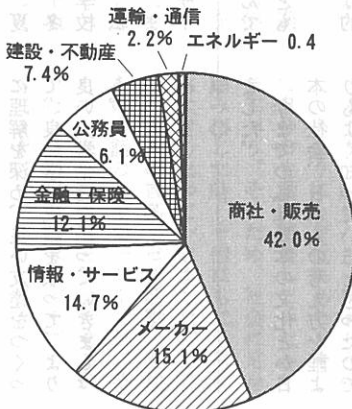
■平成6年3月卒業予定者の  
都道府県別就職先  
(平成6年2月現在)  
※( )内の数字は、内数で女子の就職者数を表す。

企業の所在地	就職者数
秋田県	2名
山形県	4名
福島県	1名
茨城県	1名
群馬県	8名
埼玉県	1名
千葉県	5名
東京都	16名(1)
神奈川県	1名
新潟県	上越 5名 中越 47名 下越 94名
富山県	11名(2)
石川県	9名(1)
福井県	1名
山梨県	1名
長野県	13名(1)
静岡県	1名
愛知県	5名(1)
京都府	1名
大阪府	2名
奈良県	1名
徳島県	1名
就職内定者数	231名(26)
進路未定者数	8名(0)
就職希望者数	239名(26)
進学・公務員浪人・家事手伝い等就職を希望しない者	14名(5)
卒業予定者数	253名(31)

の内示(内々定)が出る七月時点での電話調査では内々定率は、四九・九パーセントと、前年同月調査の七七・一パーセントを大きく下回った。本学の第三期生は、先輩たちも経験していない先の見えない長期戦を戦うことになった。

も二目も置かれる存在として活躍していただきたい。また来年度は、今年以上に厳しい就職戦線となる。新四年生は「本社、本店訪問のほか、テーマを持って志望企業の支店、営業所回り三軒をこなせ。」他大学の学生も必死である。食らいついでい

「採用計画はゼロ」という電話回答、適性試験による足切り、三次、四次にわたる選考、最終面接での不採用通知、こうした苦闘の末、第三期生は内定を勝ち取った。本学の就職内定率九八・三パーセント(三月十九日現在)。労働省の調査結果では、理系・文系の四大、短大全体の就職内定率が八六・八パーセント(十二月末日現在)であるから、その健闘ぶりは賞賛に値する。今年の貴重なトレーニング、経験を生かし、入社後は一目



# 国際化に思う

前学生部長 村山 実

あらゆる分野で国際化が言われて久しいが、かつての流行語「家庭電化」がそうであったように「国際化」という言葉もいずれば死語となる運命にある。生産技術とコストの問題をクリアして、日本が瞬く間に電化していったのに比べ、半ば外圧により押し進められてきた国際化は、時間と金さえかければ達成できるというように単純ではない。問題は意識にあり、我々日本人が苦手とし、不慣れた部分を克服しない限り、「国際化」は真の死語とはなりえない。

明治以来、我々は祖国の繁栄を目的として外国に出かけ、多くを学び、持ち帰ることが常であった。留学先もその多くが欧米で、「欧米化」に邁進してきたのである。しかし、「エコノミックアニマル」や「閉鎖性」を代表的なイメージとしつつも、経済的に大國となった今、日本に求められている役割は大きい。アジアの一員たる誇りをもって異文化に接し、それを尊敬し受け入れる意識改革が必要であろう。それがなされて初めて多面的な人的、文化的な交流

も意味を持つてくる。

このような時期に人文学部環日本海文化学科が開設されることは歴史的にも意義深いものがある。日本海沿岸諸国から五十名近くの学生を迎えることは、まさに国際化の象徴であり、我々の意識が試される時でもある。

互いに異なる文化を背景とした人間の交流は「均質化」や「同化」ではない。異質の文化が混在し、互いにその差異を認めて尊重しながら共存と相互発展を深める社会になったとき、初めて「国際化」という言葉もその役目を終えるのである。

国際化がかつてなかったほど強力に推進されている時代を共有する若者に、人種、宗教、政治を越えた積極的なアプローチと、確かなアイデンティティに基づいた異文化尊重の心を望むものである。



# より良い 四年大学生活を

新潟産業大学留学生

徐 秋生 (四年生・中国)



私は中国人留学生として新潟産業大学で経済学を勉強して早四年目になります。今年是最終の学年となりました。新潟産業大学へ入学する前に、先進国の経済を学びたい気持で国境を越えてやってきました。異国で生活をするということはあらゆる面で大変なことで

# 感想文

新潟産業大学留学生

金 性辰 (四年生・中国)



私には幼い時からの夢がありました。それはいつか外国という大きな舞台で留学することでした。その夢を実現させるために外国語の必要性を感じたその頃、スペインの文化に関心を持っていたので

した。私がこの大学で一番苦労したことは、やはり言葉の問題であり、日本の大学生と同じクラスで勉強することでした。人の何倍もの努力が必要とされました。もしそうしないと先生の授業についていけなかったと思います。

新潟産業大学は山や田んぼが多い、緑に囲まれた自然が多い環境の中にあります。勉強するのに大変良い環境だと思います。またこの大学はあらゆるスポーツをするのに適した環境だと思います。夏になると海水浴ができますし、冬になるとスキーができます。学校のスキー授業のおかげで、今はスキーがすきになりました。また大学内には他にもいろんなサー

大学での専攻を西班牙語を選んで自分なりに懸命に勉強したこともありました。

今、思い出したら結果的にははずれになりましたが、でも今の私は日本という経済先進国で留学することができたのも夢を現実にするためだけに頑張ったからだと思えます。

雪国と言われる新潟県に最初に足を踏んでから何年目になるかも知れないほど忙しい日々を過ごしていた私が、心が通う友達ができから少しはゆとりを持ってゆとりのある生活ができることになりました。

クル活動があります。好きな部活をすることが出来ます。私は卓球部に入ることがありますが、部員たちは仲良く、とても楽しくやっています。そしてたくさん日本人の友達が出来ました。

最後に、今は国際化時代と言われていますが、地球は一つ、それぞれの国や習慣が違っても同じ人間であるということをもっと良くわかりあうことが大切です。そのため、国際交流に向けてお互いに理解を深め、良い友達をつくらせて、良い学習成績を取って、より良い大学生活を送っていきましょう。

今までの私は日本の文化とか日本の社会、日本人の考え方を誰よりもよく知っていると思っただけですが、しかし友人の目に映された私の日本に関する知識というのはわずかなものだったことがわかりました。

山の中に自分が立っていても一本の木だけを気にして全体を見抜けなくてただ森を見たような勘違いをしていたことを反省しながらもう一度やりなおすつもりです。留学生活に悔いを残さないように……

# 教務委員会から

教務部長 山崎 一輝

他大学にさきがけて、カリキュラムの大改革を行ってから、二年間が経過した。大学設置基準の改正(平成三年)とほぼ同時に改革を行ったわけであるから、教養と専門の垣根をとりはずすなど、ずいぶん思いきったことを、全国の他大学にさきがけて実行したことになる。

心配されたのは、在学中の学生にとって不利益とならないかどうかであったが、本年度も卒業判定会議を順調に終了し、その点は問題がないことがわかった。(正確に記せば、カリキュラム改革についての移行措置を数年間実施して調整を行っていた。)

ようやく、胸をなでおろしているところに、熱心この上ない諸先生方から、カリキュラムに対する新たな提案が出され始めている。やがて、再び、学部をあげて、取り組むことになるのだろうか、またまたカリキュラムを見直すことになれば、教務委員会もずいぶん忙しくなるはずである。新しい大学というのは、やはり、どこまでもフレッシュである。他人ごとのように書いてしまったが、我々教

務委員会のメンバー(箕輪先生、豊福先生、鍋田先生、西成田先生、梅沢先生、川村裕先生そして私)

の教務委員としての任期も、この三月末で満了ということで、そのところが実に春めいたこのごろの空気のようにはうれしいわけだ。教務委員会は、いつも会議が長びき、終了時間は最終バス時間にくれて、帰りの足がなくなることはしょっちゅうだった。(本当にごくろうさまでした!)

それにつけても、教務課の方々(中沢さん、中村さん……)日常の多忙な実務を適切にこなした上に、教務委員会や教授会のたびに数十ページの詳細な参考資料をワープロで作成したりコピーしたりで、本当にごくろうさまでした。

ところで、昨年度から、卒業生の成績優秀者に、学長賞が授与されているが、参考までに、該当者のデータを記しておきたい。在学生も、ひとつ、目標を設定して、頑張っただけだ。(各学年平均取得A数十二)

大学入学後、アルバイトの方に熱中するがあまりに勉学の方は、いまひとつという諸君に苦言をひ

とつ。多感なトキというのは帰らぬものだから、少なくともひとつふたつの科目でよいから熱中する程、エネルギーを傾けて欲しいと思うばかりである。

## 後輩達よガンバレ



神林 正勝 (相崎信用金庫 92年度卒)

私が社会に出るようになって、大卒と高校卒と比べられてしまいます。私が思うにそれは、遊びの差だと思えます。私もよく遊びました。ただその時学んだことは、多くの人と知り合い、人との接し方やマナーを学んだことは言うまでもありません。毎日違う人と出会うことはすばらしいことです。社会人となった今は、それが飯の種類になっていきます。

在学生のみならず色々な仕事の中で自分の仕事を見つけようと四年間を過ごしていることと思えます。私の経験では、仕事は適性よりも努力だということに今は感じていきます。あまり適性を求め過ぎると人生がつまらなくなるのではないかと思います。

社会に出れば、様々な先輩が待っています。四年間という長いようで短い期間を有意義に過ごしていただきたいと願います。

そして、いつでも強い意志を持った人間になってきてもらいたいと思えます。それは必ずいつか大きな壁にぶちあたります。それをやぶることのできる人間になってきて下さい。みなさんを先輩達は待っています。

## 在学生へひと言



片所 孝彰 (ダイニチ工業 91年度卒)

手探りの就職活動から二年も過ぎると当時に非常に懐かしさも感じられるようになりましたが、実際社会人となってみて学生生活で見つけたものが実に役立っています。今は福岡で営業の仕事をしていますが当時バイクであちこちに出かけたおかげで見知らぬ土地での生活にもすぐに溶け込むことができましたし、ゼミの活動によって知り合った友人が福岡出身でまたこちらで会うことが出来たりともかく学生のうちに行うことはすべて社会に出て役立ちます。時間が存分にある今、色々な経験をして下さい。そうすると色々な事を思ったり考えたりすることが出来ます。そういった人間的なことが出来る存在を実は社会も待ち望んでいるのです。

## 四年間ですべきこと



山田 茂 (JA長野経済連 92年度卒)

私にとって新潟産業大学は大きな宝箱でした。そして私は四年間でそこから「友」「ゼミ」「恩師」という掛替えのない宝を得ることができたのです。しかし不思議なことに、在学中は今よりもこの宝は小さかったのです。それは恐らく、あまりにも身近にあり、そして自分の生活に密着していたからでしょう。そのため、社会に足を踏み出した時、十倍にも二十倍にも大きくなっていききました。あの時の友人の言葉、ゼミ活動、先生との会話の中での一シーンが、そして「久しぶり」と電話でする何気ない話が、今の私を支えていてくれます。

自分の宝を見つける事と、自分も宝になる事が、四年間ですべき事だと私は思います。



6月5日(土) 新入生米山登山健脚コース参加 ~山頂にて~

# 校友会通信

校友会では、四月十二日本部役員会を開催、決算、予算審議のほか、今年は会則による三年に一回開かれる総会の年であることから実行委員をあげ、準備にとりかかることとなった。日どりは六月十一日(土)、会場は新装なった産大キャンパスが予定されている。

毎年四月、公務員の異動が新聞に掲載される。会員名簿を管理している事務局ではひと通り目をとおすが、チェックにも限界がある。幸い久味山会員(教職についている卒業生)については関係者により綿密な調査が行われる。

久味山会員は現在県内に小、中高合わせて四百名いるが、最近先輩諸君の管理職の就任が多くなってきた。校長四九、教頭八六、町

## CAMPUS SCHEDULE

- 4 入学式 4/5  
ガイダンス 4/6~8  
新入学生外合宿 4/8、9  
前期授業開始 4/11  
就職懇談会 4/26

5

6 大学創立記念日 6/2

7 補講 7/11~13  
前期末試験 7/14~27

8 夏季休暇開始 7/28  
アメリカ短期留学 8月上旬  
集中講義 8/29~9/13

9 補講 9/12~14  
夏季休暇終了 9/15  
後期授業開始 9/16

10

11 大学祭(予定) 11/3~6

12 冬季休暇開始 12/23  
補講 1/9~11

1 冬季休暇終了 1/11  
学年末試験 1/12~30

2 春季休暇開始 1/31  
スキー授業 1/31~2/4

3 卒業式 3/19

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1

2

3

4

5

6

相馬 三郎氏  
(専一卒・新潟支部長・会社役員)  
平成六年二月九日逝去

今井 勝 栄 氏  
(短十一卒・前柏崎支部長・税理士)  
平成六年四月四日逝去



## 編集後記

入試委員 吉村 孝司

例年ない厳しい冬を過ごしつつも、霊峰米山には未だ白雪が眩しく輝いている。厳しい冬のあとには必ず春が訪れてくるように、新潟産業大学もいまままでに増して待ち望んだ春を迎えることができた。県内初の私立4年制大学として設立し、7年目にして単科大学から総合大学への発展の第一歩を歩みだしたのである。ここまでに苦勞なされた多くの関係者各位のご尽力に敬意を示したい。ただ本当の意味においては本学の建学の精神が問われるのはこれからであり、それはなによりも本学学生が環日本海はもちろんのこと、世界に向けて羽ばたいていくことを意味する。創造かざす学び舎に産大若人の健闘を願うばかりである。